仲のいい三姉妹がもっと仲良くなるまでの話

テッポウユリ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

可愛い妹が気になって仕方がないシスコン長女の話。

百合が読みたくなって、思わず書いた小説です。３Ｐ、近親、百合、と作者の変態性が滲み出ていますが、一応　Ｒ―１７．９　を目指しました。読む際はご注意ください。

目次

導入 ―― 1
長女、日花里 ―― 8
次女、亜加梨 ―― 13
三女、由佳利 ―― 18
日花里、りぷれい ―― 23
亜加梨、りぷれい ―― 29
由佳利、りぷれい ―― 34
やけに頭の中に響いて聞こえる。 ―― 41
息を切らしている亜加梨はかなり不審に映ったらしい。 ―― 47
唇を尖らせる由佳利はちょっとギャップがあって可愛かった。

導入

最近、妹が色気づくようになってきた。

好きな奴でもできたのだろうかと鎌をかけてみるものの、一向にぼろを出す気配もない。直接聞ければいいのだが、ヘタレな私にそれができるはずもない。

結局、服を真剣に選び、化粧を練習する妹を陰からこっそり覗き見るのが私の日常になってしまっていた。

がさつな私と違って2つ下の妹、亜加梨はかわいくて気の利いた女の子だ。昔から私なんかよりもずっとしっかりしていて、世話焼きな面もある。中学二年生となる今では女性らしさを増して、育ちつつある体のスタイルでクラスの男子の目を奪っていることは間違いない。

だからそろそろ彼氏ができてもしょうがない。……しょうがないのだが、あのかわいい妹が自分から離れて男の元に行ってしまうのはやはり寂しいものである。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と私のあとを一生懸命ついてきていた妹がいつの間にやら「ほら、髪結んであげるからじっとしてて」と私の世話を焼きだすようになったのにもびっくりだったが、いずれはそれも「お姉ちゃん、まだ彼氏できないの～。ウケる～」と女子力のない姉を蔑むようになってしまうのだろうか。

ぞくぞくする背筋を宥めていると「日花里ーご飯よー！」とお母さんに呼ばれ、慌てて階段を駆け下りた。

食卓にはお母さんともう一人、我が家の三姉妹の末っ子、由佳利がいた。今年で小学五年生になるが、背の低さから未だに低学年にしか見えないことを本人も気にしているらしい。高二の私、中二の亜加梨、小五の由佳利と三年おきに三人の女の子が生まれたうちでは、よくお父さんが肩身を狭そうにしているのが目に入る。

由佳利はいわゆる天才タイプで、家では猫のようにゴロゴロ暮らしながらテストで満点以外をとったことのないという素晴らしい頭脳を持っている。ただ筋力や運動神経はゼロに等しく、膝の上に載せて抱きしめてあげると全く逃げ出せないばかりか、極度の恥ずかしがり

屋なので、極上の赤面を見せてくれる。
ちなみにそのままくすぐってあげると格別に可愛い笑顔を晒してくれるものの、一週間の間、人を殺せそうなほど憎しみを込めた視線に晒され続けることになる。私が今後被虐方面に目覚めたとしたら、それは由佳利のせいだと思っていい。
「亜加梨は部活で遅くなるから先食べててって」
亜加梨の部活、吹奏楽は完全に体育会系だ。朝練、昼連、放課後の練習と忙しい日々を送っている。オーボエを担当する亜加梨は肺活量を鍛えるために走り込みまで行っていて、日々持ち上げている楽器のせいであの細腕から信じられないほど力を持っている。多分、体力面ではもう全く勝てないのだろう。
最近は勉強面でも威厳を保てなくなってきたし、お姉ちゃんピンチかも……。
「ひか姉、醤油とって」
私の勉強面での悩み筆頭である由佳利はマイペースに箸を進めている。
最近は腕試しとか言って、検定にも手を出しているそうだ。ちなみに、今度受けようとしているのは私が中三の時に必死こいて取った漢字検定準二級である。
こんな優秀な妹たちと、優しくて料理の上手い母、仕事が忙しくて平日は顔も見ることができない父が私の大事な家族である。

お風呂から上がると、先に出ていた由佳利が眠そうな顔でテレビを見ていた。瞼が今にもくっつきそうで、と言うよりも何度がくっついては離れてを繰り返していた。
「ほらーそんなに眠いなら早く寝た方がいいよー。寝ないと育たないよー」
私がソファーの隣に座ると由佳利は首をこちらに預けてきた。例の一件以来、完全にスキンシップを避けられていたが、最近になってようやく平気になったようだ。
「だいじょーぶー」

心なしか語尾が間延びしている。外ずらをクールに見せようとしている由佳利も眠気には勝てないようだ。私が心の内でほっこりしていると、

「いっつも寝てたひか姉は胸ちっちゃいけど、夜遅くまで頑張ってるあか姉は胸もおっきくなってきてるから」

と言われた。

んだとぉ、こらあー！

膝の上で抱きしめる刑に処してやる。さすがにくすぐりはやらない。あれは亜加梨からも私が悪いとこっぴどく叱られた。

四十キログラムもない小柄な体は膝に乗っけるとちょうどいい重さになる。湯上りの石鹸のにおいと子ども故の温かさを堪能しながら、さあ、恥ずかしがれ！　と思っていたが、一分もしないうちに寝息が聞こえてきた。

無垢な寝顔を見せる由佳利に、かわいいなあと思いつつ、ふと頭をよぎることが一つ。あれ、これ部屋まで運ぶのムリくね……。

結局お母さんに「由佳利はちゃんと自分の部屋で寝させるようにして」とお小言を頂きながら、部活で疲れ切った亜加梨に手をすり合わせて一緒に運んでもらいましたとさ。

頬に何かが触れる感触がした。

「お姉ちゃん、朝だよ」

心地よく揺さぶられ目を開けると、太陽の日差しが瞳を刺した。顔を動かすと、中学の制服を完全装備した亜加梨が私のベットに乗っていた。

「んんー？」

さっき触れたものが何か気になり、手で頬っぺたを触ってみるものの何かがあるというわけでもない。

「ど、ど、どうしたの？」

なぜか動揺した声を上げる亜加梨を不思議そうに見ると、手を横に振り何かを誤魔化すかのように咳ばらいをした。

怪しい。

「きょ、今日も部活の朝練あるから……。お姉ちゃん、ちゃんと起きるんだよ。二度寝しちゃだめだよ」
そう言って足早に部屋を出ていった。私はぼーっとする頭で違和感を探ろうとするものの、何もわからずとりあえず朝ご飯を食べることにした。

食卓には誰かに頼ることなくしっかり一人で起きたであろう由佳利がパンを頬張っていた。私は長いこと亜加梨に起こしてもらう生活を送り続けたため、目覚ましのセットさえしなくなってしまったというのに。
亜加梨は恐らくもう行ってしまったのだろう。少し寂しく思いつつも私も自分のパンに口をつける。
やっぱり何かが怪しい。
実は朝練とか言いながら男との逢引なのでは……!?
彼氏ができたのにお姉ちゃんには紹介もないの？　確かめなくてはならない。もし悪そうな奴なら裏でこっそり話をつけて――。
「ひか姉、顔が変」
由佳利の一言で現実に戻された。
ちょっと、うら若き女子高生の顔に向かって変とはなんだ、変とは。
これは頭なでなでの系かな。由佳利を膝の上に載せようとしているとお母さんに「遊んでないで、早く食べて学校行きなさい」と叱られた。私はいいとしても由佳利を遅刻させる訳にはいかない。
解放してあげると由佳利は稀に見る素早い動きでランドセルを背負い、小学校へと走っていった。
しょうがない。今回は許してやろう。
亜加梨については休日にでもゆっくり話を聞こうかな。

――――
「お姉ちゃんと買い物なんて久しぶりだなー。えへへ」
週末、私は亜加梨と二人で町の中心地に出かけていた。
「なんか珍しいね、亜加梨が甘えてくるの」

「そ、そうかな？」
亜加梨の手は私の腕に回されていて、体が触れ合うほど近い。長女としての唯一の威厳と言ってもいい私の背は約百七十センチメートルと女にしてはかなり高い。二人で並ぶと、ちょうど亜加梨の頭が私の鼻先に来ることになる。
同じシャンプーのはずなのにうっとりする香りを漂わせる亜加梨を見下ろしていると、小さい頃よくくっついてきていたことを思い出す。
あの頃は少し離れただけで「お姉ちゃーん」とべそをかきながら必死に走って来ていて、それを見て癒されていたものだ。今となってはそれも……まあ、滅茶苦茶可愛いのは今も変わりないけれど。
「お姉ちゃん、これどうかな」
そう言ってミリタリージャケットを私の身体に当てる。正直ファッション感覚には自信がないけど、少し格好良い系でいい感じかも。
「背高いからボーイッシュなのもかっこいいなあ。でも足長いからミニスカで魅せるのも捨てがたいし……」
悩みながらもキラキラとした憧れの目で見られると、体がむずむずする感じだ。私が調子に乗って鏡の前でポーズをとると、「わあ、かっこいい」と店に迷惑にならない程度に手を合わせてはしゃいでくれる。
妹よ、そんなことしたら姉の鼻が伸びてしまうではないか。
結局そのままその店では乗せられるがまま、私の服を数着選んでもらってしまった。
その後はフードコートで一休みだ。
そこで私は乙女の匂いをぷんぷん漂わせる亜加梨からどうにかして恋愛事情を探ろうと思う。

二人揃ってクレープを片手に空いた席に腰を下ろしたところで、本題を切り出そうとする。
しかし、口火を切ったのは亜加梨の方だった。

「最近、お姉ちゃん、何かあったりした？」
　出鼻を挫かれたのと、漠然とした質問が飛んできたことにポカンと口を開ける。
「はあ、何か？」
「お姉ちゃんに、もしかして、彼氏……とかできちゃったのかなあって……」
　カレシ、かれし……、彼氏!?
「いやいやいや、無理無理無理」
　オタクの若干入った私にできる訳ない。ていうか負け惜しみじゃないけど「彼氏より妹たちと一緒にいたいです」って感じの私は齢十七にして喪女になりかけている気がする。
　でもそっか、そんなこと亜加梨は考えてたんだ……。ていうか、
「あ、亜加梨こそどうなの……、その……そろそろ恋人できたり……」
　な、流れに乗って言ってしまった。
　高鳴る心臓を押さえつけて眉間に力を入れる。変に見えないように視線を少し左の方に外しつつ、じっと答えを待つと、亜加梨は寝耳に水、と言った表情でキョトンと首を傾げた。
「なんで？」
　本当に何もわからないといった顔でこちらを見てくる亜加梨に、私の方がたじろいでしまう。
「いやーだって、近頃様子が変だしー。後、この前の朝もなんか怪しかったしー」
「そ、それは……」
　視線をそらして頭を掻きながら言うと、亜加梨が顔を伏せた。
「それは？」
「お姉ちゃんが、かまって、くれないから……」
　呟くような声に心臓が撃ち抜かれた。頭の中でズッキューンと効果音が鳴り響く。これほどまでに破壊力のある言葉が他に存在するだろうか。いや無い。
「だって、お姉ちゃん、高校入ってから一緒に遊んでくれなくなったし。お出掛けも滅多にできないし。それに、それに！『かわいい』と

か『大好き』とかって言ってくれなくなった！」
ヒートアップしていく言葉に、私は目を白黒させることしかできない。頭の奥がジーンとして、なぜか目から涙が零れそうになる。
なんだ、私の勘違いだったのか。
お洒落を気にするようになったのは、私がかわいいとか言わなくなったから？　言われてみれば、こっそり覗いているとチラチラと亜加梨からの視線を感じることがあった気がする。私はそれを邪魔だから出て行って欲しいのかと思い、トボトボとその場を後にすることが多かったのだが。
少しは妹離れをしようと抑えていた蓋が緩み、愛情が込み上げてくる。
「大好きだよ！　亜加梨！」
「私も、お姉ちゃん！」
店の中で急に抱き合った私たちは、かなり目立っていたと思う。亜加梨は昔と変わらず、腕の中にすっぽり収まるサイズで懐かしさを覚えた。背中に回された手がギュッと服に皺をつける。
「か、帰ったら、一杯甘えてもいい？」
帰り際、最後に耳元で囁かれたその言葉がいつまでも、私の中をぐるぐると回り続けていた。

長女、日花里

帰ったら一杯甘えてもいい？

大事な妹にそんなことを頼まれて、断ることができるわけがなかった。

家に帰ると亜加梨は私の部屋まで付いてきた。亜加梨は私のことをベッドに座らせると、「じゃあ甘えちゃおっかなあ」と恥ずかしげに笑みを浮かべた。

亜加梨が私の腰に手を回す。子供の頃にはしなかった花の香りが鼻腔をくすぐる。顔全体を私の胸の辺りにうずめる様にくっついていて、反対に私には腰の下に二つの双丘が押し付けられている。

服越しからもわかる。こいつ、見た目よりもかなりデカい……。

軽い敗北感に襲われていると、下の方からスンスンという鼻息が聞こえてきた。

「ちょ、何匂い嗅いでるの!?」

「だって、懐かしい匂いだから」

まだまだ物足りなさそうな顔でこちらを見上げてきた亜加梨は、私が口ごもるのを見てもう一度私の身体の匂いを嗅ぎだした。

何これ!? チョー恥ずいんですけど！

実の妹に延々と匂いを嗅がれるってどんな羞恥プレイなの！

しかも今日は外出して汗をかいていそうだし……。変な匂いとかしないよね？

思わず自分の二の腕を鼻に近づけてみるも、自分の匂いだからだろうか、全くわからない。それよりも大きく息を吸った途端に、亜加梨の方から甘い花の香りが漂ってきた。

そうだ。

ふと思いつき、くっついていた亜加梨を無理やり引きはがした。強引に拒絶されることはないと思っていたのか、亜加梨は吃驚した表情を隠しきれていないようだ。

甘いな、亜加梨よ。お姉ちゃんもやる時はやるんだ。

そう心の中で呟いて、まだ呆けている亜加梨を強く引き寄せる。ついでに服も捲り上げて露になった亜加梨のお腹へ鼻を直に押し付けた。

すぅーっと息をすると頭の中が花の色に染まる。

いいねえ、これ……。亜加梨がしたくなるのも少しわかる。私のを嗅いで楽しいのかはわからないけれど、身体中が満たされていく感じはだいぶ癖になる。

もう一度吸うと指先まで亜加梨で一杯になっていく。

「え、えっ、えっ!?」

いきなり状況が変わったせいで未だパニックから抜け出せていない亜加梨を尻目に、もう一度大きく息を吸う。

「お、姉ちゃ、何して……」

「んー、何って？　亜加梨はいい匂いだなあと思って」

顔を覗き込むと羞恥と狼狽で顔を真っ赤にした亜加梨が私の顔を押し返す。あまりの愛くるしさに顔がにやけるのを止められない。

そしてこの時は久しく得られなかった優越感に浸りすぎていたのだ。だから忘れてしまっていた。力勝負じゃもう勝ち目なんてないことに。

「もう、お姉ちゃん!」

意識が復帰し、ある程度顔の火照りが収まった亜加梨が私の手首を掴んだ。すると呆気ないほど簡単に引き剥がされてしまい、そのまま後ろ手に拘束される。驚いて振りほどこうとするも、ピクリとも動かなかった。

私が慌ててもがいているうちに亜加梨は足まで絡めてきて、完全な拘束が完成した。

「お姉ちゃん」

後ろで怒った声を上げる妹を振り返った。しかし、声ほど顔は怒っていない。目は爛々としていて、どちらかと言うと笑っているような表情だ。嫌な予感に顔が引きつる。

「今度は私の番だね」

にっこりと笑う亜加梨に背筋が僅かに震えた。

亜加梨が私へのお仕置きとして責める場所に選んだのは耳だった。たかが耳と侮ることなかれ。私は自分でもこんなに耳が弱いとは今まで知りもしなかった。

「ん、んぁ。あぁ、そこ駄目だって……。ひゃぁ」

左耳の外側を指でなぞられると背中がゾクゾクして、裏側を引っ掻かれると嬌声が溢れ出た。今は両手両足を捕らえられているために口元を抑えることもできず、自分の声とは思えない高い声が垂れ流されている。

「待っへ、あきゃり、ちょっと待っぁあん」

口に含まれた右耳は舌でゆっくりと舐められて、時折軽く立てた歯でコリコリと甘噛みをされる。その度に呂律が回らなくなり、背中が思いっきり反らされてしまう。

そして最もきついのが忘れったころにやって来る……、

「はい、お姉ちゃん。ふぅーー」

「んはぁぁぅぅっ」

吐息責めだ。

耳の中に息を吹き込まれると温かい何かが頭の中を駆け巡る。ぼそぼそとした音が鼓膜の奥まで届いて、脳みそを溶かしてぐちゃぐちゃにされた気分だ。一瞬こわばった身体は一気に弛緩して、ぐったりと体重を後ろに預けた。

顔が火照るなんてどころじゃない。薄着のはずなのにいつの間にか汗をかき始めていて、身体の中心がなぜか熱くなる。

とっくに腰は砕けていて、意味のある言葉を発することもできていない。

「ふぅ、ぅぁあ。ひぃいゃぁぁ」

指先は慈しむ様にこそこそと耳元を這い回り、あられもない声を絞り出していく。

いつの間にか亜加梨は私の顔をじっと見つめていて、これ以上赤くなるまいと思っていた私の顔が目玉焼きができそうなほど熱くなった。

顔を隠してしまいたいのに力の抜けた腕が拘束から抜け出せるはずもなく、泣き出したいほどの情けない顔をつぶさに観察されていた。

亜加梨は幸福を発散するかのように恍惚とした表情を浮かべていて、対して私は緩みきった顔を逸らすことしかできないのだ。威厳も何もあったものではない。

何とかして口元だけでもしっかり閉じようと思うのに、耳の穴に指を突っ込まれた瞬間、情けない喘ぎ声が歯と歯の隙間から漏れていった。

結局その後、三十分ほどたって離された時には私の顔はドロドロだった。涙は許容できるとしても、涎と、さらには鼻水まで最後の方には出てきてしまい、情けないやらなんやらで妹の前で泣きじゃくるという醜態をさらしていた。

亜加梨は「よしよし、えらいねえ」と子どもの相手をするように頭を撫で、私の顔を手際よくティッシュで拭いていく。さっきまでのとは違った、髪を梳かれる心地よい感触にリラックスして息を吐いた。

その時、ドアの前からコンと物音がした。

ゆっくりと顔を向けると、そこには由佳利が所在なげに立っているのが見えた。亜加梨の顔がさっと青く染まる。私は頭が回らすにぼんやりと由佳利のことを見つめていた。

「いったい……、いつから？」

亜加梨の声の語尾が震えていた。

「えっと、その。ひか姉とあか姉が、揉み合っていたところ？　から」

あれ、結構最初の方じゃない？

「あの！　きょ、今日のことは誰にも言わないから」

若干頬を染めた由佳利は唐突に踵を返すと下に駆け下りていった。途中で階段を踏み外したかのような音が聞こえたが、私たちは立ち上がることもできなかった。

「……どうしよう」

無事に再び階段を下りていく音がしているのを聞きながら、悲壮な

声でぽつりと呟かれた声に、私は何も返すことができなかった。

次女、亜加梨

次の日から、由佳利が目を合わせてくれなくなった。
まるであれだ、夜中に目を覚ましたら両親の情事を目撃してしまった思春期の女の子のようになっている。……まあ、大して違いはないどころか、由佳利が見てしまったものの方がインパクトが大きいかもしれないのだが。
さすがにお母さんにも不信感を抱かれたらしく「あんたたち、喧嘩でもしたの？　日花里、また変なこと由佳利にしていないでしょうね」と叱られてしまった。
違うの！　とは思ったものの、まさか真相を話すわけにもいかず、さらに言えば全くの的外れでもないその言葉に視線を伏せることしかできなかった。
ところでだ。
問題は私ではなかった。
普段から情けない姉の、人には見せられないレベルの情けなさが露呈したとしても、ぶっちゃけなんとかはなるだろう。
しかし、頼れるもう一人の姉のエスっ気たっぷりの恍惚とした表情を見てしまった純粋な妹はどうなるのだろうか。
結論を言うと、ひたすら逃げ回るようになったのである。
リビングに亜加梨が入ってくるとそそくさと席を立つ。顔を合わせると踵を返し、家の中からはドアが勢いよく閉められる音がよく響くようになった。
そしてこのあからさまな拒絶に対し、亜加梨は精神的ダメージを積み重ねていくこととなる。

――――

「と言う訳で、第一回末妹の機嫌を直そう会議を始めます」
久しぶりに見る亜加梨の半泣きの顔に、姉魂に火がついてしまった。なぜかノリノリな私に、亜加梨はすでに涙を引っ込め嘆息気味だ。
「ようは亜加梨が怖くないんだってことをわかって貰えればいいんだ

よ！」
亜加梨をベットに座らせて、自分は勉強用の椅子でふんぞり返る。
性格まで美人な妹は人に嫌われることも慣れていないはず。そういう意味では今回の件の解決は私の方が適任と言ってもいい。わ、私が別に嫌われ者って言う訳ではないんだけどね！
「そうは言っても……」
私怖くないのに……と亜加梨は呟いているが、あの光景を見たら怯えても仕方ないと思う。私くらいの上級者（？）になれば問題ないけど。
だから目下やるべきことは――。
「亜加梨の可愛らしさをアピールしていけばいいかな。後は亜加梨なんて指先でちょちょいのちょーいだってわかるようにするのもいいかもしれないね！」
「おねえちゃんなんで楽しそうなの……」
じっとりとした目で亜加梨が見てくる。
ち、違うの！　亜加梨にあれ着せたりこれ着せたりしたいとか思ってないから！　でもやっぱ着てみない？　めっちゃ可愛い服をこの前見つけたんだけど。
ちょっと思考が暴走したら、これ見よがしにため息をつかれた。
結局、変な服は用意しないと固く約束させられることとなった。
そして最終的になぜか妹から、不出来な妹を見るような眼差しで見つめられることになった「第一回末妹の機嫌を直そう会議」は、上の妹の機嫌を若干悪くして幕を閉じた。

――――――

「これ、どういうこと!?」
数日後、ベッドに両手足を拘束された亜加梨が、珍しく険のある表情を浮かべて私を見上げてきた。
手足はピンと伸ばされ、身体を捩じることさえ辛そうだ。衣服は薄手のキャミソールに下着のみで、下手をすると裸よりもエロティックな見た目をしている。

まあ、こうしたのは私なんですけどね！
ベッドの脇には私と由佳利が立っている。
由佳利は戸惑ったようにもじもじと身体を揺らしていた。視界に亜加梨が入ってしまうと申し訳なさを感じるのか、慌てて顔をそむけている。その様子は抱きしめてあげたいくらい可愛らしかったが、今回の目的はそれではない。
「亜加梨が怖くないことをわかって貰おう作戦」
顔を赤くして手を動かそうとするが、そこは安物とはいえ、さすがは手錠。全く抜け出せそうにない。
亜加梨が怖くないことをわかって貰おう作戦とは、無防備で可愛らしい亜加梨を由佳利に見せ、一緒に愛でて……コホン。一緒に遊んで仲良くなろう、という作戦だ。刺激的な記憶と恥ずかしさの共有で、より一層仲を深めることも目指しているため、そばに立つ私たちもキャミソールのみの着用である。
「自由に、どんなことしてもオッケーだよ」
由佳利に語り掛けると、好奇心と罪悪感に揺れた瞳をした目線を左右に揺らした。
「どんなことも……」
「ほらほら」
由佳利の手を掴んで亜加梨のふくらはぎの辺りを触らせる。
「くっ、ちょっと……」
亜加梨が眉根を寄せて、端正な顔が少し歪んだ。
滑らかな絹のような手触りに、由佳利の心が奪われたのがわかった。由佳利はそのまま手を滑らせていき、その度に拘束している手錠からカチャカチャと金属音が鳴った。
「ほら、こんなことも」
顎の下を撫でると、亜加梨は必死になって顔を振り回す。ここを触られるとだいぶきついようで、先ほどから引きつった声を上げ続けている。
由佳利の小さな手は下腹部や内もも等、なかなか際どいところを責め続けている。この子には才能があるんじゃないだろうか。

「ちょ、お姉ちゃん！　由佳利を――って、そこぉぁあぁぅ、ダメダメダメ！」
　由佳利の指先が衣服の中にもぐりこんだ瞬間、亜加梨が悲鳴を上げた。
「あっそこは爪で優しく引っ掻くとよく効くよ」
「ん」
「うぅぅぁ、何てことを小学生に教えてぇぇぁぁあんんん！」
　モミジのような小さな手がペタペタと体を撫でまわす度に、亜加梨から甘い声が滲み出る。いつの間にか由佳利も笑顔を浮かべていて、楽しそうに様々な場所へと手を伸ばしていく。
　普通は同性でも躊躇してしまいそうなアンタッチャブルな所まで遠慮なく刺激して嬌声を搾り取っていく光景は、まるで自由自在に音を鳴り響かせるピアニストのようだった。
「ふぅぅっ、一旦、休憩、しによ。ういいぃぃぁぁあぁ！　休憩！　ストっほぉぁぁぁぁ」
「由佳利やるねぇ」
　由佳利は亜加梨に喋らせることすらさせないつもりの様だ。段々と由佳利の目に熱っぽさが生まれ、私の言葉にも反応しなくなっていく。
　一方亜加梨は可愛らしい反応すら返すことができず、顔を真っ赤にしていた。口を開いている途中に遮られることで、思いがけないところから声が出てしまい、結果として「周りを意識した嬌声」ではなく、「取り繕う余裕のない悲鳴」に次第にシフトしてきていた。
　十五分ほどたつと、変化が生まれ始めていた。
　一心不乱に熱中して楽しんでいる由佳利はそのままだが、亜加梨の体力が尽き始めたのだ。慣れない行為に力を使い果たしたのか、ぐったりと力を抜いて由佳利の手を受け入れるようになった。時々ピクピクと反応するものの、基本的には声を垂れ流すばかりだ。思春期の女の子がしてはいけないような表情を隠すこともなくなり、視線は宙に固定されていた。
「んひぃ、ん。んぁぁ」

目をとろんとさせ、無抵抗な様子の亜加梨を見て、そろそろ限界かと思い腰を上げた。
腋を掴んで由佳利の小柄な体を持ち上げると、一瞬硬直した後に耳の先から首筋までが真っ赤に染まっていった。どうやら私のことを完全に忘れていたようだ。
「どう、楽しかったでしょ」
「えっと……」
下からにやけた顔でのぞき込むと、由佳利は目をあっちこっちに向けながらも小さく頷いた。そしてその答えに私の口元がニューっと上がっていくのを見て、少しだけむっとした表情を浮かべた。でも、
「でも、まあ、あか姉、かわいかった……」
上気した頬でうっとりと言う由佳利。詰まるところ、私たち姉妹は似た者同士ということなのだろう。
亜加梨はいつの間にか気絶したように眠りについていた。私たちは手分けをして顔を拭い、拘束具を取り外し、服を着せ替えた。せっかくだからと姉妹三人、川の字で眠ることを決めた頃には、丁度正午の日差しが惰眠を貪ろうとする私たちに降り注いでいた。

三女、由佳利

あの日、私たち姉妹の仲はより一層深まることとなった。

普段からベタベタしているなかなか稀有な姉妹関係だったとは思うが、さらにスキンシップが激しくなり、両親から奇異な目で見られるようになった。

特にツンデレな由佳利がデレたことが大きく、三人で引っ付き合っていると母親から「いい加減妹離れを……」なんて言われるのも一度や二度ではなくなってきた。

でも、まだ物足りないのだ。

何がって？

だって、まだ、由佳利の可愛い顔を拝んでいない……！

確かに由佳利はまだ幼い。あんなことをしてしまえば体力的にも心配だし、もう手遅れかもしれないけど、変なものに目覚めさせてはいけない。さらに言うならば、だいぶ前にくすぐりすぎて本気で嫌われそうになったばかりだ。

それでも、それでもあの時の由佳利を忘れずにいる私は何と罪深い姉なのだろう。

今回のことで、締めていたはずの箍がまた緩み始めているのを感じていた。敷居が低くなったというか、「由佳利も責める方をやっていたんだからやられてもしょうがなくない？」と考えるようになった。

そしてとうとう亜加梨に相談をしてしまったのだ。由佳利にもあの体験をしてみてもらいたいと。

これが間違いだった。人間、一人では勇気が出ないことでも同じ考えを持つ人が複数いると、何となく流されてしまうものだ。

そう、亜加梨はこの提案に乗ってきた。小悪魔のように赤い舌をチロリと出して、「私もあんなに恥ずかしい思いを由佳利にさせられたしね」とほほ笑んだ。

弁明させてもらうとすれば、これは、由佳利を苦しめるためのものでは決してない、と言うことだ。私たちは由佳利が大好きで、大切に思っていて、だから同じ体験をして「もっと仲良くなりたいな」と言

う気持ちで行動しているのだから。
だが、こういう経緯から、ここに由佳利包囲網が完成することになった。

えー、只今の時刻は、午前六時であります。
電気をつけずにパジャマ姿のまま部屋に立つのは私と亜加梨の二人。部屋は母親の趣味でピンクに彩られているが、置いてある小物はシックな物が多い。無理矢理可愛らしさを消したような趣もあり、この部屋の持ち主が頑張って背伸びをしているのが感じ取れる。
そう、ここは由佳利の部屋である。
当の本人は幸せそうな寝息を立ててベッドの中で丸まっている。時折、枕に甘えるかのように頬をこすりつけているのが見ていて微笑ましい。
私と亜加梨はそれぞれ由佳利の頭側と足側に分かれて、ベッドの上に優しく腰掛けた。そのまま掛け布団を優しく剥ぐと、パジャマに包まれた小さな体躯が露になる。
ふと顔を上げると、いたずらっぽく笑みを浮かべた亜加梨と目が合った。「どうする？」「やっちゃおっか」「最初はゆっくりね」「お姉ちゃんこそ」こんな会話が一瞬のうちに交わされた気がした。
だからと言う訳でもないけれど、手を伸ばしたのは全く同時だった。私は羽根をもって顔の付近に行き、亜加梨は筆をもって裾を捲り上げてお腹を狙った。
「んふっ」
私の羽根が鼻の周りをくるくると動くと、由佳利は小さく息を漏らした。羽根はその後、顔中を這いずり回った。時には口を開かせようと真一文字に結ばれた唇の上を左右に往復し、時には耳の穴の中にまで侵入し、こそこそと音を立てた。
「むぅ」
由佳利がむずがって顔を左右に振る。そして、一分もしないうちに

長いまつげがぴくぴくと動き出した。
とろんとした瞳を瞬かせる由佳利。さすがの由佳利でも、目覚めてすぐは頭が働かないらしい。そもそも小学生である由佳利は、朝の六時に活動する機会はほぼないだろう。
体の違和感に手足を伸ばしたり縮めたりしているが、私たちの手はその抵抗をかいくぐって体の中に潜り込んだ。
「ふんっ……んぁ」
次第に由佳利の鼻息が荒くなっていく。さらさらした髪がほつれてくしゃくしゃになりだした頃、あたしの両手がガシッと掴まれた。
「ひか姉、何してんの」
じっとりとした目を向ける由佳利。気が付けばあれからさらに五分ほどたっており、さすがに目も覚めるというものだ。覚醒してすぐ長姉にからかわれていることを悟ったようだ。置かれている状況がわからずパニックを起こしている由佳利を見れなかったのは残念ではあるものの、本番はここから。
私が視線を軽く向けると、真剣な顔で頷く亜加梨。由佳利は不思議そうにその視線の先を追い、亜加梨が手を伸ばしてきているのを見て、顔を凍り付かせた。
「ひいいいゃあああ」
甲高い悲鳴が鳴り響いた。
亜加梨の手は優しく腰のあたりを揉みこんでいた。腰から下に降りて行ってお尻を通り過ぎ、さらに太ももを撫でまわすと上に戻っていく。これがたまらなくくすぐったいようで、非力な体で信じられないほどの力を出して暴れまわっている。私たちはこれを押さえつけるように由佳利の身体の上に腰を下ろした。
だが馬鹿力はいつまでも続くものではない。すぐに体力は底をつき、抵抗が弱弱しくなっていく。元々非力な由佳利が脱力すると、ふにゃふにゃの寒天みたいになった。
「はふっ、はうぅ」
そのままくすぐったいところと気持ちいいところを同時に撫でてやると、顔を真っ赤にして口をパクパクと開いた。

何これかわいいんですけど。
可愛さに負けて、つい人差し指をその開閉している口の中に突っ込んだ。
「んむっ!?」
驚いたように眉を上げる由佳利。私はその反応に気を良くして、指で頬の裏をこする。
「んあっ、ふぃかねぇ」
「んー？　どうしたー」
「へ、へんだよ、それぇぇ」
口蓋をさすり、歯茎をねっとりとなぞる。舌を絡め捕りながら指を引っこ抜くと、未知の感覚に目を白黒させた由佳利と目が合った。いや、なんだか焦点が合っていないようだ。
「あ、いいなー。お姉ちゃん、それ。私もやりたい」
「後でね」
私が笑いながら長女特権を利用すると、亜加梨はむうっと口を尖らせた。その間由佳利は口を半開きにして、そこから零れて伝う涎を気にすることなく、虚空を眺めていた。
結局、七時頃には私たちもすっきりとした表情を浮かべ、由佳利は解放されることになった。あれからも口の中を二人で交互にくすぐり続け、日常ではありえない初めての感覚に翻弄され続けた由佳利の情けない悲鳴をたっぷり聞くことができた。
普段弱音を吐こうとしない初心な女の子の切羽詰まった困惑の鳴き声は、素晴らしいものであった。
ふと見ると、なんだか亜加梨の顔が艶々としている。私がニヤニヤしながら指摘すると、亜加梨はこちらを指さして、「お姉ちゃんこそ」と言った。なんだ、どっちも変態じゃないか。
私たちの様子を涎と涎の跡を残して情けない格好で聞いていた由佳利は、精一杯憮然とした表情を浮かべ「目くを鼻くそを笑うだね」とぽつりと呟いて鼻で笑った。
強がりなのは見え見えだった。けれども、私たち二人は傷ついた表情をした。そしてこっそりと笑みを浮かべ、由佳利に向き直る。

この後、第二回戦が開かれたことは言うまでもないだろう。

日花里、りぷれい

夏らしい蒸し暑いある日、私の部屋にノックの音がした。
「どうぞー」
扉を開けて入ってきたのは、お母さんだった。
「日花里、今度の面談なんだけど……な、何してんの？」
そして、お母さんは私の方を見た瞬間、固まった。
私はちょうどその時、ベットに腰かけて膝の上にある由佳利の髪を梳いているところだった。由佳利は気持ちがよさそうに目を閉じてウトウトしていて、亜加梨は私の肩に寄りかかって本を読んでいた。
まだこれくらいだったら良かったのだろうけれど……。
なぜか亜加梨の手は私と腕を組む様に手を絡ませているし、由佳利に至っては私のお腹に顔を押し付けてスンスンと鼻を鳴らしている。
外の気温は三十度を越えているというのに、家の中でベタベタしている姉妹は私達です、はい。
お母さんは変なものでも見るように私たちを見ていたが、「ほどほどにね」という念押しと共に要件を済ませて帰っていった。

――――――

「というか二人とも暑くないの？」
ドアが閉じたタイミングで口を開いた。
「こんなの大したことないよ」
とは真夏でも走り込みを行う吹奏楽部員の言である。亜加梨は辛さを微塵も感じさせない様子で朗らかに笑う。私なんか脂汗で顔がてかっているというのに、亜加梨のそれは何かが違う。僅かにほつれた髪が汗で頬に張り付いて、言い表せない色っぽささを醸し出している。
因みに由佳利は汗一つかいていない。今撫でている額もさらっさらのままだ。すべすべで気持ちいい。
でも私の手汗で少しずつ湿ってきた。いやー、幸せな空間なんだけど、さすがに暑すぎる。

と言う訳で。
「ちょっと、シャワー浴びてきてもいい？」
膝の上の由佳利をコロンとベットに転がし立ち上がると、恨みがましい目でじっとりと睨まれた。もう三十分くらい撫で続けてたんだけど、まだ足りないのかい？
「あ、じゃあ私も一緒にお風呂入る」
本から顔を上げた亜加梨が満面の笑みで言う。それに釣られるように「私も入る」と由佳利が目を輝かせた。
「えっ、洗ってくれるの？」
冗談めかして笑いかけると、
「いいよ、洗ってあげる」
「私も洗うー」
と同意の返事が返ってきた。おう、マジか。『妹たちに体を洗ってもらう』という長年の夢がこんなあっさり叶ってしまうのか……。
そのまま着替えを取りに行った二人を見送り、私もタンスに手を伸ばした。

「お姉ちゃんは先入っててね」
私は服を脱ぎだすが、亜加梨と由佳利は互いに恥ずかしそうに身体を見つめ合っていて、一向に脱ごうとしない。仕舞には脱衣所から追い出され、浴室に押し込まれた。
じろじろ見てたのが悪かったのだろうか。まあ、多感な思春期の子だからしょうがないか。
中に入っても、洗ってもらうという約束なのに、先に洗いだすわけにもいかず、シャワーだけを浴びて二人を待つ。
二人はなかなかやって来ず、私が焦れてきた頃にようやく浴室の扉が開いた。
同性同士で入るというのに、二人ともしっかりタオルを体に巻き付けていた。だが甘い。私みたいな人間は、妄想を掻き立てられる方がイケない気持ちになりやすいというのに。

「お姉ちゃん、じゃあ髪から洗ってあげるね」
亜加梨がにっこりと笑顔を浮かべて言った。隣で由佳利もコクコクと首を縦に振る。亜加梨は堂々とした足取りで歩いてくるのに対して、由佳利の方は恥ずかしげに最近意識することの多くなった小柄な胸をタオルの上からしっかり押さえて歩いている。
超かわいい。
天使だ。天使が二人もいる……。
「じゃあ、お願いね」
二人は顔を見合わせると、何かを決心したかのように同時に頷いて、シャンプーを泡立て始めた。
「痒いとこないですかー」
「ないですかー」
程よい力で生え際を擦られる。
ふぃー、極楽極楽。
思わず力が抜けて垂れそうになった涎をこっそり啜る。これはヤバい。本当に天国へ行っちゃいそう。
「ひか姉、気持ちいい？」
耳元で由佳利が言う。気の抜けた私は「きもちーよー」と間延びした返事しか返せないが、その答えに嬉しそうに笑った声がした。
くすくすという笑い声が、前からも聞こえる。でもそれはどこか嘲るような響きを含んでいて――。
「お姉ちゃんってさ、本当に――変態、だよね」
……？
……え!?
空気が凍った気がした。
「何、変な妄想して涎垂らしてんの」
クスクスクス。
「ほら、こうやって妹に裸で体洗ってもらうのが夢だったんでしょ」
えっ、ちょっ、何っ。
急展開過ぎて、着いていけないんだけど！
確かに夢ではあったけど！

いきなり妖艶な笑みを浮かべ、滑らかに言葉を紡ぐ亜加梨。
「あーあ、こんなのが姉とか、情けないわぁ」
一瞬途切れる言葉。そして最後に――
「この、変態」
最後に顔を私の耳に寄せて囁いた。
背筋がゾクッとなり、緩んだ顔が凍り付いた。身体の芯が震え、どこかキュッとなる。
「ほら、次は由佳利の番だよ」
亜加梨が促すと、由佳利は視線を左右に向けた。そして、意を決したように、
「ひ、ひか姉の変態！　馬鹿っ、えーと、えーと、おたんこなす？」
と叫んだ。
由佳利は顔を真っ赤にして、今にも泣きそうな顔でこちらの様子を伺っている。
何これかわいい。凍り付いていた表情が再び緩みだした。ていうかおたんこなすなんて死語どこで知ったのかしら。亜加梨は隣で「まったくもう」と口をとがらせている。
「まあ、今のは冗談なんだけどね」
な、なんだ～、冗談か……。つまらなそうにネタばらしをする亜加梨を見て、ほっとした。
お姉ちゃん、慌てちゃったよ……。
「でも――」
もう一度右耳に顔が近づいてくる。
「こうやって罵られるの、好きでしょ？」
ヒュンっと心臓が動く。
クスクスクスと笑い声が聞こえた。
「変態」
はうっ。心臓がばっくんばっくん音を立てている。いつの間にか右腕が絡めとられていて、立ち上がれないようにされている。
助けを求めるように由佳利を見ると、愕然とした表情を浮かべているのが目に入った。

「ホ、ホントにこーゆーのが好きなの……？」
ち、違っ。
「ひか姉のへんたい……」
先ほどと違い、心の底から思ってそうな声色で呟かれたその言葉は、私の心を深く突き刺した。だが、同時にカッと顔が熱くなる。
あ、今、完全に何かの扉を開いた気がする。
腰が抜けたようで足に力が入らない。
呆けた私を見て、由佳利は確信を深めたようだった。軽蔑の色を瞳に写し、おずおずと腰を下ろすと、亜加梨と同じように腕を絡める。
それを見た亜加梨がにっこりと小悪魔な笑みを浮かべ、口を開いた。
「ほんと、妹に罵られて喜ぶとかありえないよねー」
「変態」
「そのくせ高校生にものなって胸ちっちゃいし」
「貧乳」
「うわ、顔赤くなってきた」
「淫乱」
右、左、右、左と来る罵倒の言葉に圧倒されて、目の前がくらくらする。同時に囁き声に反応して背筋がゾクゾクした。さらには両側からの香りとほのかな温かさに体の芯が熱くなる。
「お姉ちゃんみたいな人間は、こうやって体が隠れてた方が妄想を掻き立てられて興奮するんでしょ」
「えっ」
亜加梨がいたずらっぽく目元を緩めタオルの裾をヒラヒラさせると、合いの手を入れていた由佳利がつっかえた声を出した。恐る恐る理解できない何かを見る目を向けられて、内ももをキュッと締める。
と言うか亜加梨には色々バレてたのか……。
普通だったら長く続けられると心が折れてしまいそうだけれど、二人は私の心が萎びてきたタイミングを見計らって、

「嘘嘘。お姉ちゃん大好きだよ」
「私もひか姉、好き」
と囁いた。
結局それからは裸でイチャイチャし続けた。
夏なのに一時間近く風呂から出てこなかった私達は、最後にお母さんからつまみ出されることで決着となった。

亜加梨、りぷれい

「う〝ぁー、疲れたよ……」

亜加梨が夏合宿から帰ってきた。文字通り疲労困憊と言った有様で、帰って来るなり制服のままソファーに倒れこんだ。

しかし私は知っている。

今の今まで、疲れなんて微塵も感じさせない顔で友達に手を振って別れを告げていたことを。

この子はそういう見えを張るタイプなのだ。今頃亜加梨の友達は体力の底の見えない亜加梨に驚き、そして感心している頃だろう。

「お姉ちゃん着替えさせてー」

そして家の中に入るなり、お母さんがいないからと言って私に物凄い勢いで甘えだす亜加梨。でもやっぱりその姿が可愛くて、つい世話を焼きたくなってしまう。

手際良くプリーツスカートとシャツをはぎ取り、部屋着を被せていく。亜加梨はもぞもぞと私の手の動きに合わせるように体を動かし、器用にTシャツの袖に手を通した。

去年は家族の前でも気丈な様子を崩さなかったから、実はたいしたことのない合宿なのだろうと勝手に思っていた。しかし、この様子を見るに、前回は私たちの前でも弱音を吐かなかっただけらしい。

最も、今回は少し大げさにしているみたいだけど。口元はにやけていて、目が合った瞬間さっと目をそらされた。

でも可愛いから許す。

「マッサージもしてー」

着替えも終わっていないのに、甘えた声を上げる。それでもやっぱり私は「しょうがないなぁ」と言いつつ、うつ伏せになった亜加梨に跨り、背中のあたりに手を添えた。

背中に親指を押しこむ度に、鼻にかかった喘ぎ声のようなものと一緒に花の香りが部屋に巻き散らかされる。

どうして私の妹はこんなに色っぽいのだろうか。
体中がその匂いに包まれると、思考が曇り、ぼんやりとした気持ちになっていくのがわかる。
だから、リビングのドアが開いたことに全く気付かなかった。
気づいた時には、由佳利が私たちを見下ろすように立っていた。
由佳利はドアをゆっくり閉めると人差し指を口に当てて、ベッドに寝転んだ亜加梨と視線を合わせるようにしゃがみこんだ。
「あか姉、気持ちよさそうだねえ」
「っ！」
にやにやと口角を上げながら由佳利が言う。緩んだ顔を妹に突然覗き込まれて、亜加梨はギョッとすると同時に恥ずかしそうに顔を赤くした。そのまま慌てて立ち上がろうとソファーのひじ掛けに手をついたが、体は一ミリも浮くことなく再び沈み込んだ。
疲労困憊の上、腰には私が跨っているのだ。リラックスして力の抜けきった亜加梨が立ち上がれるはずもない。
亜加梨が抵抗できない様子を見ると、何かを思いついたように
「そっかー、今日はお疲れ様。いい子いい子ー」
と言い、良い笑顔を浮かべて頭を撫でだした。
由佳利が赤ちゃん言葉でからかいながら頭を撫でると、見る見るうちに亜加梨の体温が上昇していった。何とかして顔を由佳利から背けようとしているのだが、由佳利は頭を抱えるようにして撫でているため、それすら叶わないようだった。
由佳利は何とも上機嫌に言葉を投げかけ続けている。
由佳利、楽しそうだなあ。
そんなことを思いつつ、マッサージを続けながらお尻や太ももの方まで手を伸ばす。ちょっとした出来心でお尻の中心を指でなぞると、「ひゃっ」と声を漏らして、体がビクンと跳ねた。
あっ、これ面白いかも。
いちいち反応してくれるのが面白くて、つい続けたくなってしまう。スーッと人差し指一本でなぞるだけで、「ひはぁ」とかいじらしい声を出されると、やってるこちらも楽しくなるというものだ。

由佳利は楽しそうに髪を梳き、耳の裏を引っ掻きながら首筋を撫でて遊んでいる。
私がお尻を弄ると太ももにびっしりと鳥肌を立たせ、由佳利に顔をさすられると今度は二の腕に鳥肌を立て、なんだか忙しそうだ。
次第に強制的に息を吐き出し続けさせられた亜加梨の呼吸が荒くなる。
小動物がしていそうな「フッーー、フッーー！」という威嚇音みたいな音を上げているが、逆にそれを途切れさせるのが結構楽しかったりする。
途中で詰まると「ふーーっひあぁ」のようなちょっと間の抜けた反応を返してくれるのだ。
私と由佳利は夢中になって、どっちが先に音を上げさせられるかを競い合うようにこの遊びに没頭していった。

――――

「ふぁ、も、もう、いいでしょ……。んぁ、みゃっ、マッサージも、もーいいから……」
か細い声で亜加梨が言った。
丁度私が五本の指を使ってお尻の上で開いては閉じてを繰り返していた時のことだった。ちなみに由佳利は両耳の穴に小指を突っ込んでぼそぼそと小刻みに動かしていた。
かわいそうなことに亜加梨は口元から垂れそうになる涎を拭えず、ぷるぷる震えることしかできていなかった。
時間が経ち、息が切れると長い言葉を続けて言うことができないらしく、「あっ」とも「んっ」とも言えない声を上げ続けて虚空を見つめていた。
かろうじて絞り出したその言葉に私としては十分満足したので手を止めたのだが、由佳利は違った。
何か名案を思い付いたようで、私に耳打ちをしてきた。コソコソと耳に当たる息がかなりくすぐったい。

「なるほど。まあ、いいんじゃないの」
私としてはどっちでもいいけど。でも、少し面白そうだから軽く頷いて同意を示す。
亜加梨がどこか怯えたような視線を私たちに向ける。特に、によによとした笑みを浮かべ続ける妹の方を。
「と、言う訳で、私のこと由佳利お姉ちゃんって呼んでくれたら止めてあげる」
最後にノリノリな様子で由佳利はこう言った。
『お姉ちゃん』
それは私にとって当たり前に掛けられる言葉だ。こう呼ばれるだけでどんなに妹たちが優秀でも、私のちっぽけな自尊心が満たされるのを感じる。
逆に言うなら、絶対この立場は手放したくない。それは、亜加梨も思っているのではないだろうか。
由佳利はそんな年功序列の立場に、反逆を企てたのだ。
亜加梨の目には困惑の色が宿り、投げかけられた言葉の意味に気づくと羞恥でカッと瞳を燃え上がらせた。けれども、もう一度耳たぶをカリカリと引っ掻かれると「んぅ」と声を漏らし、瞳の輝きを曇らせた。
抵抗は一分にも満たずに終わりを告げた。というか、ここまでの責めで精神がボロボロになりつつある亜加梨にろくな抵抗はできなかった。
カリカリカリカリと指が動く度に眼の色が濁っていき、最後には蕩けきった瞳を瞬かせ、ぎゅっと真一文字に結ばれていたはずの唇がゆっくりと開く。
「わ、わかったから……。その、ゆかり、おねえちゃん……」
――おお、これは破壊力あるわぁ。
甘えているような声なのに、どこか拗ねた様子が感じられる。いつも言動がしっかりしているからこそ、無防備に心を開いている感じがたまらない。
隣の由佳利を見ると恍惚とした表情を浮かべている。お姉ちゃん

歴十四年の私と違い、初めて自分に向けられた『お姉ちゃん』と言う言葉が強烈すぎたようだ。

私は「もう一回……」と呆然とした様子で呟く由佳利に軽くチョップして正気に戻し、亜加梨が掻いた汗をタオルで拭きとった。

――――

着替えの最中にこんなことを始めたせいで、ズボンを履かずに下着の見える状態のまま過ごしていた亜加梨がそのことに気づき、半ば八つ当たり気味に私の服まで脱がそうとして来るまで、あと十分。

由佳利、りぷれい

突然だが、あなたはお化けを信じるだろうか。
私は中学に上がるまではいるものだと信じていたし、お化け屋敷なんか入る前に泣き出すほどの怖がりだった。
実は今でも結構怖い。
高校の文化祭のお化け屋敷でさえ、私にはハードルが高い。前に涙を滲ませて放心状態から立ち直れなくなってしまったために、お化け役の男子からものすごい勢いで謝られたことまである。
亜加梨は私と同じで長らくお化けの存在を信じていたが、こういったものに耐性があるのか、あまり怖がるそぶりは見せなかった。今では驚かされれば驚くけれど、お化け屋敷ではそれを楽しめるようになっているようだ。
ここで何を言いたいかというと、『お化けを本気にしているかどうかと、ホラー系が苦手かどうかは必ずしも一致しない』ということである。
さて。
由佳利は聡明な妹だ。幼稚園の時にはすでにサンタクロースの正体を暴き、小学校に上がる頃には我が家の金銭事情をしっかり把握した値段のプレゼントをお父さんに頼むようになった。
お化けについては「物をすり抜けるとかありえないし――」などとませた発言で全否定している。
この前置きから勘のいい人なら何が言いたいか分かるかもしれない。
そう――。
由佳利はホラー系が『大の苦手』なのだ。

――

今は三人でホラー映画を見ているところだ。
由佳利は青ざめた顔でテレビを凝視している。右手で私の袖を、左手で亜加梨の袖を強く握りしめて震えている。
「そんなに怖いなら、先寝てたら」
軽い感じで笑いかける私も余裕はない。と言うより、由佳利にリタイアしてもらって、それに着いていく形で抜けようと思ってこの発言をしている。
先に一人でベッドに向かうのは長女としてのプライドが許さなかった。
由佳利は薄目でテレビを見ているが、もう遅い時間なのもあって時々眠そうに目を瞬いている。ただこの中途半端で抜ける方が逆に嫌だそうで、なかなか立ち上がるそぶりを見せていなかった。
それにしても怖すぎるんだけど！
恨めしげにこれを録画した亜加梨を見るが、気づいた様子も見せようとしない。それどころか驚かされる度に「キャー！」とかわいい叫び声をあげてけたけたと笑っている。
ずるいなあと思いながら視線をテレビに移すと、その途端画面一杯に血塗れの女性が頭が映し出された。

「っっっっ!!!」

左手が由佳利に力強く引っ張られ、そんなことに意識を向けることができないほどの驚きが私を襲う。
こーゆー系ムリだって！
叫んだはずなのに声が出ない。目は見開き、口の中が乾燥していく。
こうして致命的な不意打ちを食らった私と由佳利は、結局呆れた顔をした亜加梨に連れられて介護されるように別室へと連れて行かれた。

――――

十分ほどするとバクバクしていた心臓も落ち着きを見せ、何とか余裕のある顔を取り繕うことができるようになった。ちなみに由佳利の手は未だ私の服を掴んだままで、そこにいじらしさを感じる。
「私と一緒に寝るんだったら、どうなるか分かってるよね～」
ベッドに腰かけ、手をワキワキさせてからかって見る。
由佳利は結局私の手を放さず、「一緒に寝る！」と言い張って部屋まで付いてきてしまった。正直私としても夢にさっきのが出てきそうだしウェルカムな気分ではあるけれど、何か茶化していないとこの薄っぺらな虚勢さえ剥がれ落ちてしまいそうだった。
由佳利はその言葉に怯えるように体を震わせた。しかしその後、か細い声でこう言った。
「な、何してもいいから……一緒に寝て……」
……。
私はにやけた笑顔のまま固まった。私が返事を返さないことにより沈黙が訪れ、二人で向き合ったまま時間が過ぎた。
え……。いいんだ。
それだけさっきの映画が怖かったのかな？
ようやっと解凍された私はぎこちない笑顔で下を見下ろすが、そこにはそんな様子にも気が付かず一心不乱に握りしめた私の服の裾を見つめている由佳利がいた。
罪悪感という刃が私の心をごっそりと抉っていった。

明かりを消してベットに入ると、もぞもぞと由佳利が私の腕の中に体を入れていく。すっぽりと収まるサイズでかなり抱き心地が良い。柔らかな感触と仄かな熱でリラックスした気分にさせられる。
「ひか姉」
そうして幸せな気分で目を閉じると、由佳利が顔を私のお腹に押し付けてくぐもった声を漏らした。

「その、今日は何もしてこないの……？」
その不安七割、疑問二割の中に一割だけ混じった期待の響きに私は気が付いてしまった。
あれ……？
あれれ……？
これはやらかしたか。
どこか物欲しげな表情を浮かべる由佳利を見てそう思った。
確かにこの前はやりすぎだったかな……。多分そういったことに興味もまだあまりない小学生には、ほんのちょっと、いや少し、えーと結構激しいことをしたような気がする。
小学生の妹にイケない遊びを教えてしまったのかもしれない。
由佳利は布団の中で体を私に押し付けるように動かしている。

「もしかして……『何か』されたかったの？」
「え、違――ひゃぁ」
赤らめた顔でバレバレの嘘を吐こうとした由佳利のお腹をぐにっと掴むと、蕩けるような甘い声が上がった。
うわぁ。なんていうか。
エロい。
それに尽きる。
「そっか。由佳利はそんなエッチな子になっちゃったのか。お姉ちゃん悲しいよ」
「ち、違うってば！」
無意識にしているであろう体の揺すりを止め、ぎょっと目を見開く。そして自分の中の気持ちを指摘されてしまったことで、その気持ちが表層へと表れていく。同時に自分の求めていたものがエロい、つまりは恥ずかしいことだと認識してしまい、羞恥に飲まれていくように頭から湯気が立ち上り始めた。
「あ、違う、違うの……。そうじゃ、なくて」
おろおろと視線を動かす由佳利。だんだんと自分の気持ちに自信

が持てなくなってきたようで、最終的には「わたし、わたし……」と声を詰まらせていた。
このまま由佳利の様子を見ているのも面白そうだけど……。
でも期待して待っている妹を放って置くって言うのは姉として失格だよね！
そう自分の中で言い訳をするが、本音では今色々したらとても楽しいことになりそうだなぁと思っていた。
と言う訳で。
えいっ。
ちゅっ。
額にキスをすると由佳利はポカンとした表情で私を見た。
唇に感じる熱が心地良い。その熱がキスと共に私に伝わってくるような気がした。
なぜだか今まで何度もしたことがあるのに、こちらまで恥ずかしさを感じてしまう。由佳利の顔は火照っていて、その熱を吸い取った私の頬も赤くなっているのだろうか。それはわからないが、自分でも何かに興奮していることは理解できた。
「ひかねぇ――」
由佳利の口が小さく開いた。私のことを呼んだ後は口をすぼめたり開いたりしていて、何を言っているのか聞き取れなかった。
だが私の耳は勝手に幻聴を感じ取った。
『もっと……』
「何？　もっとして欲しかった？」
その言葉に対して、由佳利は潤んだ眼をこちらに向けるだけで肯定も否定もしなかった。
そこで私は由佳利の肩を抱え込む様に持ち上げると、有無を言わさず鼻の頭、頬、目尻、口角、首筋と徐々に下に向かいながらキスの雨を降らしていった。
由佳利は楽しそうに「きゃはぁー」と声を上げて身を捩る。私はその抵抗を片腕で抑え込み服の裾を一気に捲り上げた。
「へっ？」

あまりの勢いに何が起こったのかわからなかったようだが、半脱ぎの状態で両腕を押さえつけられていることに気が付くと猛然と暴れだした。しかしそこは体格差もあってあまり障害にはならない。

そのまま体を被せて鎖骨の辺りに唇を落とす。

ちゅっ。

「ひぅ」

優しく、焦らすように腋の近くにもう一つ。

「ふぁ」

お臍の真ん中にも。

「っ！」

キスをする度にビクッと震え、小さな声が上がる。そんな白くて小さな身体が愛おしくて、私はいたるところに口を寄せていった。

気が付いた時には由佳利は無抵抗に私を受け入れるように寝そべっていた。私の手はなぜか無意識にゆっくりと由佳利の身体中を撫でまわしており、それが過敏な所を通る度にあられもない声を響かせる要因となっている。

私は息を整え幸せな気分に浸りながら眼下を見下ろした。服は大きく乱れて、目には涙が溜まっている。顔は火照っており、うわ言のように私の名前が囁かれた。

うん。今日はよく眠れる気がする。

得も言われぬ満足感が私を包む。

ただ、このまま寝てしまうのが惜しくて、最後に思わずスマホのカメラを起動した。

もう一度ベッドに戻ってくる頃にはすうすうとした寝息が聞こえはじめ、その音を子守歌に私の意識は深く沈んでいった。

後日、その写真は亜加梨には大好評だったが、一週間もしないうちに二人で眺めてニヤニヤしている現場を抑えられてしまった。ひと悶着あったものの、最後は真っ赤な顔の由佳利にぽこぽこ叩かれなが

らあえなく削除されることとなってしまった。

やけに頭の中に響いて聞こえる。

「今ね、学校で催眠術が流行ってるんだ！」

そんな突拍子もないことを言い始めたのは、三つ下の妹だった。聞くところによると、これにかかると何でも術者の言いなりになってしまうらしい。

それに対して私が鼻笑う仕草をすると、彼女はリスみたいに頬を膨らませた。

「今笑ったでしょー。これはホントに掛かっちゃうんだから」

しっかり者の亜加梨がそんなことを言い出すことが可笑しく、振り返って由佳利に同意を求めたが、帰ってきたのは真顔だった。

「ひか姉、催眠術は本当にあるよ」

え!?　由佳利まで！

堅物な末の妹にまで反論された。

そのまま如何にして科学的に催眠術があり得るものなのかを説明されたが、残念ながら私にはチンプンカンプンだった。

とりあえずあれでしょ？　プラシーなんちゃらがすごくて、なんとか試験で明らかになったってこと？

首を傾げながら「そんなことも知ってるなんてすごいねー」と頭を撫でると、馬鹿にされたと思ったのか、こちらにもリスがもう一匹増えてしまった。

ちゃうねん。お姉ちゃんには難しすぎてわからないんだよ……。

不機嫌な雰囲気を漂わせる二人を前にして、私には催眠術を受けることを承諾するしか道は残っていなかった。

――――

「じゃあ、被験者はお姉ちゃんだからね」

いや、まあいいけど。

そうして言われるがまま亜加梨の膝の上に、向き合うような形で腰を下ろした。

うわっ。これ恥ずかしいかも……。
キスできそうなほど近い距離にある整った顔を見て、気恥ずかしさから顔をそらした。大体私の方が背が大きいのにこの体勢は、なんだか事案っぽく見えてしまう。
「いい？　今から私が机を軽くたたくから、お姉ちゃんはその音だけに集中するんだよ」
私は軽く頷いた。
しかし、この体勢をどうにかしないと集中できそうにない。
まず目線の置き場がない。先ほどから私は挙動不審なほど視線を彷徨わせていた。緩めの胸元から覗く大振りの『ソレ』に視線が引き寄せられていくのだ。
それだけではない。甘い匂いとか、太ももの感触とか、かすかに聞こえる息遣いとか、五感を刺激するものが多すぎる。
だがそんな中でも、無防備な笑顔を浮かべる亜加梨によって催眠術は始められた。
「はい、じゃあ力を抜いてー。深呼吸」
私は従順に亜加梨に従った。亜加梨は私に話しかけながら、『トン、トン、トン』と軽めのタッピング音を打ち鳴らし始めた。
その音は思ったよりも小さくて、私はそれを聞くために耳を澄まさなければならなかった。
「右腕の力を抜いてー」
わざとなのか、気の抜けるような話し方に、私もゆったりとした気分に浸り始めた。
「次は左腕ねー」
タッピング音が鳴り続ける。
意識しなくても力が抜けて、リラックスしてきた。ただし睡魔すらやって来る気配がない。
「今度は右あしー」
意外と『トン、トン』という音が癖になる。胸の奥がぽかぽかとした気分になり、いつの間にか心地良さを感じ始めていた。
「最ご――だり脚のちか――抜いてー」

気が付くと、解放感と多幸感が体を包み込んでいた。心地よい音に包まれ、幸せな気分で「ふはぁ」と息を吐く。
その時、プシュっという音と共に脳を震わすほどの甘い匂いが蔓延し、体が一瞬ふらついた。
フッと部屋の照明が落ちた気がした。それくらい急に視界が暗くなった。

――

トン、トン、トンと規則正しく音が続く。先ほどから、やけに頭の中に響いて聞こえる。
「どうー？」
あぁ、なんかいいかも……。
極楽極楽……。
「ふふっ。お姉ちゃん気持ちよさそう」
亜加梨の笑い声が聞こえる。なのに、反響していてどこから聞こえてくるのかがわからない。それに返事をするのも億劫で、私はその言葉に軽く頷くことで応えた。
その間にも音は鼓膜を優しく叩き続け、私の意識を曇らせていく。
「これ、凄い効果だね。ひか姉、もう腕とか上がらない？」
ぼんやりと霞んだ思考の中、由佳利の声が聞こえた。ただ、いっている意みがよくわからない。うでならほら、こうやって――
「あれ？　あか、らない……」
私の腕はピクリとも動かなかった。
なんで？　どうして？
空気が重たい。よく疲労感が増した時に『泥の中を動かす感じ』とも言うが、そんな感じだ。
今回のこれは、まるでコンクリートで押し固められているように感じた。それくらい体が全く動かなかった。
だがしかし、なぜか危機感のようなものはほとんど感じられなかった。

「へー、本当に手も動かなくなるんだね」
感心した声を上げる末妹に抗議の声を上げようとするが、代わりに口からは「うぁあ」という気の抜けた音が零れ落ちた。
なにぃ？　これぇ？
思こうがまどろっこしい程におそい。いつの間にか後頭部に感じる亜加梨の胸の存在を知り、初めて体勢が崩れていることに気付いた。
「これ、声聞こえてるのかな？」
「大丈夫。寝てるのは身体だけだから。心は起きてるよ」
少し不安そうに話す由佳利に、亜加梨は満面の笑みで答えた。
「ねっ、お姉ちゃん！」
そしてキラキラ眩しい笑顔を私に向けてきたが、当然反応は返すことができなかった。

――――

動かなくなった私の身体は、二人にとって絶好のおもちゃだったようだ。頬っぺたを軽く抓られ、唇を指でなぞられる。さらにはおふざけ半分で脱力しきった腕を持ち上げては下げてを繰り返して、完全に遊ばれているようだった。
今、私の身体は完全に二人の妹の手の内にあった。
「金縛りみたいなものかな、これ……？」
そう言ってペタリと脇腹に触れる小さな手の感触で、私の二の腕にゾッと鳥肌が立った。
「あっ。こうやって反応はするんだ」
体を動かすことはできないのに皮膚だけが反応しているのが面白かったのか、そのままフニフニと揉まれ続ける。その度に私の頭に直接その感触が伝わってきた。。
体を動かすことができれば少しは紛らわすこともできるのだろうけれど、今の私は手足を拘束されているとき以上に動くことができず、体を震わすこともできなかった。

送られてきた感覚は逃げ場がなく、頭の中を暴れまわりながらどんどん蓄積されていく。
優しく揉まれているだけなのに、形容しがたいほどのもどかしさが私を襲う。
「うひぃぃ……、ひは、っぁ」
呼吸が辛い。意識して息を吸うことができなくなっていて、規則正しく動いているその呼吸を遮られてしまうと、その分の息が吸えなくなってしまう。
酸欠で頭のボーっと具合が加速していく。
さらに甘い声が脳髄に響く。
「可愛い……お姉ちゃん。もっと乱れて……」
蠱惑的な囁き声が頭の中を犯していく。
同時に手の感触が徐々に臍の下辺りへと移動していく。
「っふぅ、ん……。やめぇ」
半開きの私の口から涎が零れた。
思こうがとぎれていく。
おなかのあたりがなんだかあつい。
──。
わけぁかんない……。
──。
──。
あれ？
りせいがくす〝れて……。
──。
──。
──。
頭の中の思考領域を白い何かで覆いつくされた時、私の意識はプツンと途切れた。
──

今日はなぜか妹たちが優しい。
何があったのか聞いてみたものの、二人は顔を見合わせると首を横に振って「なんでもない」と口をそろえた。
そうそう。結局催眠術はあまりうまくいかなかったらしい。私が眠るだけ眠って、体を支配するみたいなことは全くうまくいかなかったようだ。
なぜか亜加梨は申し訳なさそうに謝っていたが、私としては変なことにならずに良かったくらいで、別に謝られるようなことはされていないと思うけれど。
そうして上機嫌で部屋に戻る私の横で、なぜか亜加梨と由佳利が気まずそうに視線をそらしたのが見えた気がした。

息を切らしている亜加梨はかなり不審に映ったらしい。

ある晴れた昼下がり、私と亜加梨はベランダに通じるドアを開けた。

その日はカラッとした快晴だったため、スライドドアを開けた途端にエアコンで冷えた体に心地良い温かな風が、部屋の中に吹き抜けた。

ベランダには家族五人分の洗濯物がユラユラと揺れており、私たちは顔を見合わせると、慣れた手つきで服を部屋の中に取り込み始めた。

家の中の亜加梨は甘えん坊な一面がある。私としてはそこがチャームポイントだと思っているのだが、亜加梨はそれを表に出したがらない。彼女はクラスではしっかり者の優等生な訳だし、一度着いたそのレッテルを容易に剥がしたくないという感情がそこにはあるようだ。

そのせいか、家ではあんなに甘えてくる癖に外ではしっかり者を気取っている亜加梨は、ベランダに出た途端に雰囲気を変えていた。どうやら家の敷地を出た訳でなくても、外から見える場所ではこのキャラを壊したくないらしい。

凛とした雰囲気で、しかしにこやかな笑顔を浮かべる彼女は、私なんかよりもずっと頼りがいのある見た目をしていた。その横顔は余裕のある落ち着いた風貌と相まって、とても年下には見えなかった。

……。

このままでは長女の座を奪われてしまう……。

そんな危惧が頭の中にふとよぎった。そして、浅はかな考えではあるとわかってはいたが、私にとって唯一頼れるパターンにもっていこうと、私は亜加梨の服の中に左手を突っ込んだ。

そんなものにしか頼ることのできない自分が情けなく感じるが、こ

の時はなぜかこれでうまくいくという根拠のない自信があったのだ。

――――

「お姉ちゃんっ」

家の中ではあまり抵抗することのない亜加梨の咎めるような声に、心が浮き立った。私はその声を無視するようにお腹の方へと腕を回していく。

「ちょっとっ！　ここ外だよ！」

静かな声で器用に怒り声をあげる亜加梨。しかしそれを無視して右手を持ち上げる。

触れるか触れないかの微妙な強さで脇腹を撫で上げると、そのまま顔へと手を伸ばす。首筋を撫でながら顎のラインを通って耳へと到達させる。そこから耳たぶをフニフニと揉んで、髪の毛に手を突っ込んだ。髪の毛はさらさらとして手触りがよく、それを楽しみながら手櫛で梳くように頭を撫でた。

亜加梨は真っ赤な顔で小さな唸り声をあげて、妖しい刺激に耐えていた。

最後にうなじをすっとなぞるとピクンと体が跳ね上がった。

少し潤んだ瞳でこちらを見上げてくる。さすがに周囲の目が気になって理性を捨てきれないようだが、思考が徐々に傾きつつあるのが感じられた。

ねっとりと、少しずつ。理性を一枚一枚はがしていけるように、強い刺激を与えないように気を付けて手を動かす。

固く握りしめていた亜加梨の拳が少しずつ緩む様が目に映った。体全身も強張りが解け、ゆるゆると力が抜けていく。

そして、亜加梨の精神が侵されきった時、その手から取り込んだバスタオルが滑り落ちた。

「あっ」

タオルがプラスチック製のベランダの床に広がり、軽く積もった砂のようなものが巻き上がる。それを拾おうと屈んだ時、下から声が聞

こえた。

――――

「あれ？　亜加梨じゃーん！」

空気が凍り付いた。

さっきまで甘ったるい空気が流れていたはずなのに、外部からの刺激によって急激に周囲が冷え込んでいく。

「舞美ちゃん……」

呆然とした表情で亜加梨が呟いた。なるほど、どうりで聞いたことがあると思ったら、亜加梨のクラスメイトか。

「さすが亜加梨、えっらいねー！　洗濯、自分でしてるの？」

「い、いつもしてるわけじゃないよー。……た、たまたまだってば」

引き攣った笑顔を浮かべ、世間話を始める亜加梨。さすがに頭の回転が速いのか、パニックになっているはずの頭を力づくで押さえつけて、しどろもどろながらも会話を続けられていた。

たった数秒で心を落ち着かせたのか、亜加梨は先ほどまでしていたことをおくびにも出さず、ベランダの下に向かって言葉を投げかける。向こうからしたら、屈んだままの私も見えないだろうし、さっきまでのことなど想像にも及ぶことはないだろう。

だがそれは、なんとなくつまらない。

そこで、亜加梨が話し始めた瞬間を狙って、剥き出しになっているすらっとした太腿に爪を立てた。

「そう言えばさ、あのぉひぅっ！」

「どうかした？」

不思議そうな顔で見上げてくる友達に「何でもない」と答えながらも、しゃがみこんだ私の顔をキッと睨み付ける。

だが頬が赤く染まっている時点で全部台無しだった。私には照れ隠しにしか見えないのだから。私は無言の抗議を無視して、爪を立てたまま五本の指をウニウニと動かした。

「ぅひぃぃぃ」

「……亜加梨？　ど、どうしたの？」
亜加梨の友達の戸惑った声が聞こえる。
そりゃあ、優等生のお友達がいきなり奇声を上げたら困惑するよね。ましてや彼女に私は見えていないのだ。私はしゃがんでベランダの柵に体を隠しながら、少しずつ手を上に持ち上げていく。
亜加梨は友人の声を聴いてかろうじて意識を引き戻したのか「な、なんでもない、から」と告げていた。しかし全力疾走でもしていたのかというほど顔を赤くし、息を切らしている亜加梨はかなり不審に映ったらしい。
「熱あるんじゃないの？　顔赤いよ」
風邪をひいているのではと本気で心配するその友人に私も少し罪悪感を抱いた。だが自重はしない。遠慮なくすべすべのお肌を楽しんだ。
この頃には、外面を取り繕うのに必死な亜加梨に私を咎める余裕はなく、手すりに体重を預けて、ただひたすら相槌を打ち続けていた。
だがここまでなってしまうと私としてもあまり楽しめない。
自己中心的な考えではあるが、反応がこうも小さくなってしまうと、やりがいもあまりないと言えるだろう。
もちろん、生まれたばかりの小鹿のようなプルプル震える柔脚は見ていて飽きるものではない。しかし体力を――もしくは気力を使い果たした亜加梨からは目立った抵抗は見られず、ただ荒い息を吐くに留まっていた。
しょうがないか。
最後にお尻をポンと叩き、それを最後に手を止める。
すると亜加梨はブルっと体を震わせ、熱いため息をつき、視線を伏せた。
ちょうどその時には話もひと段落ついていたようで、舞美ちゃんは亜加梨の顔色をうかがいながら歩き出そうとしているところだった。
彼女が心配そうに何度も振り返りながら去っていく中、亜加梨はそれに固まった気丈な笑顔を浮かべて手を振り続けていた。そして最後に道を曲がり、姿が隠れた瞬間、亜加梨の身体は崩れ落ちた。

私の顔にはニヤニヤとした笑みが張り付いて剥がれない。
「お友達にどう思われたのかな～」とからかってやろうと亜加梨の頭に口を寄せると、思いがけない程強い力で襟を掴まれ、床に押し倒された。
「っつ！」
頭が軽くぶつかり合い、目の前に火花が散った。
腰を下に強く打ってそこに手を当てると、下からぬおっと影が差した。
「後で覚えててね」
真剣な眼差しをした妹に顔を覗き込まれ、体が固まる。
神様、どうかこの言葉にきゅんとしてしまった愚かな自分を許してください……。

唇を尖らせる由佳利はちょっとギャップがあって可愛かった。

「確保ー！」

湯上りでほっこりとした由佳利の両脇を、後ろから抱えるようにして持ち上げた。

「ひゃぁ？」

素っ頓狂な悲鳴を上げながらなんとか抜け出そうと身を捩る。由佳利は丁度パジャマを着終わったばかりのようで、しっとりとした肌の上にボタンが外れて前もはだけたパジャマを身に着けていた。またホカホカの体温をしており、その枝毛一つない艶やかな髪も湿らせたままだった。

身を捩るたびに水分で質量の増した髪が私の頬を叩く。それを見た亜加梨がドライヤーのスイッチを入れた。

さらさらと流れるようになっていく毛先を鏡越しに見つめながら、目を白黒させたままの由佳利が口を開いた。

「どうしたの？　二人して……」

その目には少しだけ呆れの感情が浮かんでいた。だがそれだけにしては余裕がなさそうだ。

不思議に感じて体を舐めるように見回すと、由佳利が私の手元をチラチラ覗き見ているのに気が付いた。

なんだかんだ触っているだけとはいえ、敏感な腋に手を突っ込まれるのはくすぐったいらしい。無反応を装いながらも、眉根を寄せて何とかくすぐったくないポジションに正そうと体を揺すっている。

そんな由佳利を見て悪戯心が沸き、両手をクニクニと腋に食い込ませるように動かすと「ぴゃぁぁっ」と楽しそうな悲鳴が上がった。

「ひぃっ、やめっ、……いいゃあ！」

ほれほれ、ここがええのか。

思考がピンク色に染まった私の頭を、亜加梨が手でパシンと叩い

た。
あうっ。
ゼイゼイと息を切らす由佳利が私のことを涙目で睨みつけてくる。
「今日はそれをするために来たんじゃないでしょ」
ため息をついて亜加梨が言う。
「ご、ごめん」
つい楽しくなってしまった……。うちの妹は魔性の女だな。
そんなことを考えていると、もう一度ペシンと叩かれた。
あぅ。

―――

「用が済んだなら出てってよ……」
私の指に弄ばれた形になった由佳利は不貞腐れた表情でそう言った。
先ほどとは違い羞恥で顔を火照らせ、体は汗でしっとりとさせている。
「ごめんごめん、違うの。今日はこれを一緒に見ようと思って」
そう言って亜加梨の手にあるＤＶＤを受け取り、左右に振る。すると如何にもといった胡乱げな視線を向けられた。
私が巧妙にパッケージを隠して手に持っていることに、由佳利はあっさりと気が付いた。軽くため息をつきながら、じっとりと湿った半目でこちらを睨んでくる。
「それ、自爆するんじゃないの？」
由佳利の頭の中ではこのようなストーリーができているはずだ。
「なんか怖いビデオを見つけた姉が妹をからかうためにこんなものを用意しているのだ」と。
そしてだからこそこう言いたいのだろう。「末妹と同じレベルでホラーが苦手な長姉が、妹をからかって怖がらせるはずなのに、結局自分も怖い思いをすることになる」と。

「大丈夫だって。私はもう一度見てるから。全然怖いやつじゃないよー」
「嘘!?」
由佳利は驚いた顔を見せた後、何かを疑う様に私を見る。
「本当だってば。亜加梨もそう思うよね！」
「うん……。私も少しだけ見たけど、怖い感じは全くなかったかな……」
歯切れの悪い言葉に、由佳利は口元をへの字にする。
もじもじとして動こうとはしない由佳利に私は焦れったくなり、伸びをして体を反らす。
「まあ何言っても無理矢理見せるんだけどね。はいっ、連行！」
私と亜加梨は妹の両脇を抱え込む様に拘束し、宙に浮かせる。由佳利はもがくように暴れていたが、抜け出すのが無理だと悟ると静かに腕の力を抜いた。
「ま、ひか姉が見れる程度の怖さなら平気だし」
唇を尖らせる由佳利はちょっとギャップがあって可愛かった。

三人でテレビの前に腰を下ろす。
「あれ？　もしかして今更になって怖くなったの？」
右腕を抱え込んで拘束しながら笑いかけると、由佳利の身体がビクッと体が震えた。さすがにこの直前になることで、強がりが怖さに塗りつぶされてきたようだ。
「まあ、これは大人用だから、由佳利にはまだ早いかもねー」
左腕を抑え込んだ亜加梨がその力を緩めながら「逃げてもいいんだよ」と告げる。
多分亜加梨はこれを本心から言っているのだろうけれど、由佳利には侮辱か挑発に捕らえられたようだった。
「大丈夫だし！　ひか姉もあか姉も子ども扱いしないで！」
奇しくもこれが今日一番の子供っぽい発言になってしまった訳だ

が、軽い怒りで冷静さを欠いた由佳利はその発言を堂々と言い放っていた。
うちの妹は怖さなどで余裕がなくなるとかなり子供っぽい反応を返すようになるようだ。一つ学んで心の中のノートにメモをする。
「じゃあ再生するよ」
久しぶりに見た年相応の言動に微笑ましさを感じながら、リモコンに手を伸ばす。その間由佳利は手汗で湿らせた右手で私の手首を離さないようにがっしり掴んでいた。
ピッ。
最初に映ったのは大きなベッドと二人の女性だった。
「へ？」
二人の女性が絡み合っている姿を見て、由佳利が困惑の声を漏らす。カメラは徐々に近づいていき、画面が肌色で覆われていく。
そう。今日のテーマはホラーじゃない。
「なっ。……なに、これ!?」
ギョッとしたように目を見開きこちらを見てくる由佳利の頭を、無理矢理テレビ画面に向けさせる。
「自分で見られるって言ったんだもんね。目を逸らしたりしないよね？」
そう耳元で囁くと、呆然とした表情でコクコクと小さく頷き、画面に視線を戻した。
しばらくすると画面の中で二人で軽くやっていたものが激しくなっていき、私よりも年上の女性の色香が匂い立つ。由佳利は「あんなとこまで」とか「うそでしょ」とか声を漏らしているが、その視線は画面から離れる気配はない。
おそらく由佳利は口を押えたり、目元を塞いだり、顔を手で覆ったりしたいとは思うのだが、両腕を掴まれているせいでそれらが全くできない状態だ。そのおかげで羞恥を飲み込むほど大きい好奇心や情欲を隠しきれず、コロコロ変化するその表情を観察して楽しむことができる。
なんだか、幼い子供の価値観をぶっ壊しているようで気が引ける

が、それ以上の背徳感がもの凄い。
このビデオには軽度のＳＭまで入っているらしく、次第に一方的に責められていく女性を見て、由佳利は「あっ」と声を漏らし、息を呑んだ。どちらに感情移入しているのかはわからないが、確実に今までとは違う反応に笑みがこぼれる。

十分後、さすがに小学生には刺激が強すぎたのか、由佳利は誰に言われるでもなく食い入るように画面に魅入っていた。時折腕がビクンと跳ね、無意識に体まで反応してしまっている。
同じ仕掛人であるはずの亜加梨にもこのビデオは強烈だったようで、由佳利ほどではないが画面から目を逸らせないようだった。
画面から嬌声が流れると、二人同時に背筋を跳ね上げる。
由佳利に至ってはもぞもぞと太ももをこすり合わせていて、年に似合わない淫靡な様を晒している。その上、口は僅かに開いており、そこから熱い溜息が漏れ出ていた。
亜加梨はまだ周りを気にする余裕があるようで時折こちらをチラチラ盗み見ているが、由佳利にはそれがない。由佳利は羞恥心を放り去って、一心不乱にテレビに食い入っている。

そんな妹を見て、ふと思う。
学習能力抜群の彼女が、性知識を手に入れたらどう使うのか。
自分で試す？
いいや、もっと手軽にする方法がある。なんたって、今回の件の復讐と称していつもやられていることをやり返せばいいだけなのだから。
日頃から近しいことをやっているのだ。それが『ちょっと』激しくなるだけ。ビデオで得た中途半端な知識では、罪悪感とかどころか大変なことをしているという自覚すらない状態で、無邪気に実行できてしまうだろう。

画面を見ると、全身をピンと伸ばした女性が一気に体中の筋肉を弛緩させたところだった。しかしそのビデオはまだ終わらない。そんなのお構いなしと言わんばかりの責めが延々と続いていく。

「こんなこと、できちゃうんだ……」

熱っぽい目でみるみる知識を吸収していく由佳利を見て、私の額を汗が伝った。

これは私たちの日常がさらにレベルアップしてやって来ることを意味していた。